みらい

2012 年 3 月 11 日号
発行者　壁新聞東京深川支局　和田蕗子
sakuranbo.music@gmail.com
写真協力　スタジオ プリズム
題字・レイアウト　落合辰巳

世界の心をつなぐ海

大船渡の豊かな海にきてけらっせん

震災から１年。さまざまな思いが海によって繋がれた１年でもありました。大船渡の海は人々に幸をもたらし、子どもたちには心の糧を与えてきました。そして大船渡出身仲間の支援活動の輪が、東京からフィンランド、南フランスへと拡がり、世界各地で支援イベントが行われるようになりました。輝く未来の海へ出航です。

2011 年 8 月 15 日

2004 年 6 月 15 日（提供：大船渡市役所）

変わらぬ碁石海岸の穴通磯（あなとおしいそ）

2 枚の写真は、大船渡市観光のシンボルである穴通磯の被災前後の比較です。大津波の影響が心配されましたが、1億8千万年前に堆積した地層で構成される造形は大丈夫でした。しかし、チリ地震後に建設され、左奥に見えていた大船渡湾の湾口防波堤は、押し波で崩落しました。千年に一度といわれる大津波を、この穴通磯は何回見てきているのでしょうか。自然の脅威と海の幸を求める人間の復興への努力は、襲来の度に繰り返されてきたわけです。

大船渡市は岩手県の南部、太平洋に面した三陸の陸前に位置し、椿の花が咲き、冬は雪は少なく、東北にしては温暖なところです。言葉は気仙語、京言葉の流れもくんでいてユーモアにあふれ、自慢は温かいおもてなしに海の幸です。そして、とても暮らしやすい環境です。また、三陸大船渡の観光は北に浄土ヶ浜、南に松島と有名な場所に夾まれており、内陸部の平泉を含む広域観光振興が市の重点目標です。国内外からの皆さんのご支援に感謝致しております。

復興へ一歩踏み出した大船渡に、まずはきてけらっせん！

S35　さんりく・大船渡ふるさと大使　　新沼岩保
（資源・環境・エネルギー研究所代表）

小さな輪からつながった支援

乳幼児を持つお母さんのボランティア団体、ママリングスを主宰しています。3 月 11 日。翌週にイベントを控え準備中だった私は、そのイベントのチラシを手にしながら、初めて目にする大きくしなる電線を見つめていました。その後、被災地へ物資を送る活動を始めました。はじめは都内の NPO を頼り、岩手県沿岸部の子どもたちとお母さんへ物資を送りました。仲良くしている亀戸のカフェの一角で「いったい協力してくれる人は来るのだろうか」と思いながら。

沢山の江東区のお母さん達が支援物資に協力してくださいました。

亀戸のカフェで同じくお客様として通っておられた大船渡出身の新沼さんとの出会いがありました。新沼さんは小学校の同級生の方々と一緒に故郷大船渡を支援されていました。そしてその輪に参加させていただきました。「子どもが春休みの間だけでも」と思って始めた活動が、ご縁がご縁を呼び、私はいつの間にかたくさんの方のご協力の下でまだ伺う機会のない大船渡市、岩手県とつながっています。小さな小さな支援活動の輪です。

これからも小さな輪の一つでありたいと思っています。

ママリングス主宰　落合香代子

赤ちゃん用液体ミルク。フィンランドから亀戸、そして大船渡へ。（2011 年 5 月）物資集積場として協力　五の橋商店街の薬膳カレーの店クレソン佐藤さん(左女性)、お客様と落合香代子さん(中央)

日本スタンドのお寿司コーナーでお寿司の準備をする子どもたち

南フランスからの想い

南仏・アビニョンのモンテッソーリスクールでは東日本大震災の後に行われた学校のイベントの一環として子どもたちが日本文化スタンドを設け、習字、折り紙、漫画、お寿司などのコーナーを開きました。この日本文化スタンドで得た収益はスタンドで働いた子どもたちがどこに寄付するかを議論し、最終的にあしなが募金に寄付し、震災で家族を亡くした子ども達が心のケアをしながら生活できる学生寮の建設費に使ってもらおうということになりました。

日本で被災した子ども達が一刻も早く元気になってくれるようにと遠く離れた南仏の空の下で祈っています。

アビニョン日本人会副会長　大嶋ひとみ

「ひとてま運動」が生きる希望に

支援活動は常に流動的でなければならない。”今”被災者が求めている物、事を見極め無駄のないように、かつ思いやりを含めた活動を心がけなければならない。思いやりとは”ひとてま運動”である。ただ支援物資を集め、配るのではなく、支援物資にメッセージを書き、被災者へ心を送る。数文字の言葉が、折れかけている心を勇気づけ、再起するきっかけを作ることもある。他にも震災直後は、生きることに精一杯だった被災者が少し落ち着くと同時に力が抜け、生きる希望がなくなる。その時、影で支える存在にボランティアはなっていくべきだ。被災地では、誰もが大切な誰かを亡くし傷付いて、誰にも言えず一人苦しみ、悲しみを抱え込んでいる場合が多い。それを共に抱え込み、前に進めるよう手を取り、歩んでいくことが何よりの支えだと思う。これが被災者とボランティア、人と人とのつながりとなる。復興はまだはじまったばかりだ。

皆川　直子

～直子さんは震災直後から準備をはじめ、45 日間大船渡市で単独支援活動を行い、津波到達地点の記念碑設立にも関わる。大船渡市の被災者が東京に来た時、娘さんと親子でガイドボランティアをしている。～

大船渡市末崎小学校仮設住宅にて 4 月に東京目黒区で行われる展示会に出品する手芸品を作っている皆さん

チッサイころの大船渡

おれは　大船渡しか知らないころ。
･･･出た事無い、小学５年のころ碁石祭りに行った。
汽車に乗ってバスに乗って　よしのぶと行った、遠かったな。
ななめにつきだしたはしごの上で　トラミャ踊ってた。
天気がよく　桜が満開だった。　人だかりがいっぱいでみんな笑っていた。
酔っぱらいが一生懸命、なんかシャベッてた。
帰りのバスはすし詰めで、ハーまいったまいった。

盛の田茂山の家から大船渡の海まで自転車で 40 分かな、舗装などしてない
穴ぼこだらけの道路　大人じてんしゃ三角乗りだったかな、　釣り竿もって
小野田セメントの近く盛川の河口毎朝　はぜつり、オモッセァぐらい釣れたな。
そいで　かあさんの定番　はぜの唐揚げこれが旨い。
けっこう太ってキスぐらいの大きさだったよな、･･･おおきく見えた。
旨いので頭から　全部食えたよ！　ある時　みみずと釣り針が出て来た。
それから頭を食うのはやめた。

今朝の漁を大船渡市場へ

さー　夏休みだ　通信簿だ！5ばっかりの成績優秀おりこうさんでは無かった。
通信欄に「毎日２時間目ごろから　寝ていますが何か身体でも悪いのでは？」魚は朝間と夕暮れ5時位から釣れる。
昼は魚も昼寝　釣れない。
朝早く起きて　釣りに行くのが　私の仕事、それが仕事禁止。7 時まで寝てろ命令。
それから　中学になっての夏休み冒険。赤崎の方からあたまにズボンと竿をくくりつけて泳いで牡蛎いかだに渡り　さよりを釣ったな。
魚がすれてないので　入れ食いだった。今の魚は賢くなったのか、どこいってもなかなか釣れない。いじめられてるのか。
世知辛い　人間社会と同じかな。

あ！そうそう　小学生のころに戻るね。
家の前の新しい３間道路（市計画の巾の広い道路）舗装されるまで何年もほったらがし　でこぼこ道。
赤崎方面からよく馬車がきていた。馬糞が落ちていた。10 センチ位のぼたもち大で黄色くてワラ？･･草で作った感じかな、
3 個ぐらいまとまって落ちていた。それが９月頃　サンマの季節　ひらのトラックにサンマをいっぱい積んで大船渡から遠野方面へ日に 4、5 台行くんだな。
それがいつも同じ穴ぼこでかた向く。ざば～～と　10～20 匹ぐらい　道にまいて行く。
見るとあっちからこっちまで　点々と続いていて　隣近所の奥さんからじじ、ばばまで籠もってひろってた。
その日からず～と季節が終わるまで　サンマの煙りが絶えなかった。そんとき家ではナイフとフォークでサンマハンバーグを食っていた。
これもおふくろの 18 番。　サンマをすり身にしてコロッケ大にしてこんがり焼き、もう一度　砂糖醤油で焼いていたかな？　なつかしい～
食いテーな、今度作って見っか　出来るかな？

なんも知らない、どこも知らない、のんびり平和な　田茂山村でした。そんな　家まで今回津波が来て　今は有りません　遠～い昔のようです。
なんか　いろいろ　思い出されて来たなー　でも今日はここまでで。

2012 年 3 月 1 日　　S35 さんりく・大船渡ふるさと大使　よしだひでゆき（スタジオプリズム　写真家）

S35　駆け回ったふるさと！復興の日まで！

急げ！！みんなまってるぞ。
３月第一次救援物資大船渡着

駆けつけた同級生たちが安否を確かめ合った

S35（大船渡市立盛小学校昭和 35 年度卒業同級会）は、昭和 35 年 5 月 24 日（1960 年）に小学校 6 年生でチリ地震津波を体験しました。
我々の世代は、盛町という地域に育くんでもらったという感が強く、大震災で信じられないような姿に変わった故郷に何かできることはないのかと、3 月 11 日の震災発生時から安否確認を開始し、そして 20 日に東京で集まって実施可能な支援活動を申し合わせました。

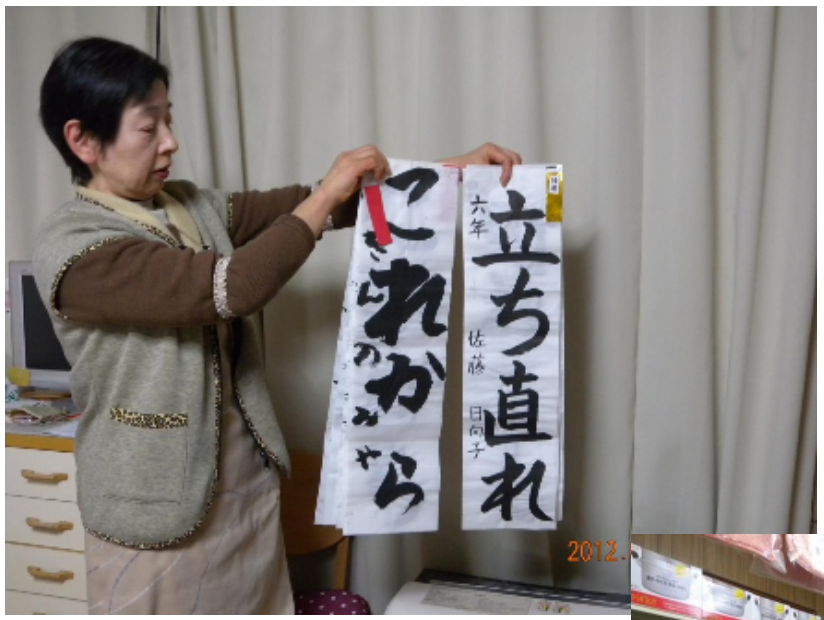
① 義援金を集め、市に直接渡す。
② 地元の要請に即応した支援物資輸送を行う。
③ 復興がなるまで継続的支援を行う。

この地元密着型で始めた復興支援は、不思議なご縁に恵まれ、大船渡を支援下さる人達の輪が国内外に広がり、現在でも新たな支援の糸が繋がっていきます。
3 月から 8 月までに 10ton 車を含む 10 便の支援物資輸送行に加え、6 月から 2 月まで盛の連絡拠点兼支援物資展示・配送所（佐々木拓子さん自宅の佐々木荒物店：通称盛宿、最近では BBT/B 級 Boutique Taku ちゃん）に届けられた物資は 336 個に上りました。ありがたい限りです。心から皆様にお礼申し上げます。

今後とも我々にできる方法で復興支援を続けていきたいと考えております。
また津波・地震防災減災の視点からもアピールしていきたいと思っております。

S35 関東事務局（新沼　岩保）

フランスから盛の七夕に届いたメッセージカードを飾り笑顔がいっぱい



ジャパンエクスポ“マルセイユ”に送る書き初めを手に
佐々木拓子さん

これもお似合いですよ（Boutique Taku ちゃんにて）

いとこらを案内して陸前高田に行ったのは震災の半年前のことだった。
10万点の貝を展示する「海と貝のミュージアム」では美しい小さな貝たちや、298キロもあるオオジャコ貝に目を凝らして見て回った。
あっという間に正午となり、近くのレストランに入ったが車いす席は空いていなかった。ところが、白衣のコックたちが4，5人来て、車いすごと奥座敷に上げてくれたのであった。その時のお寿司やお刺身は言うまでもなく美味であった。予定をオーバーしての昼食会で、松原の散策もせず帰途についた。
またいつか松原に行こうと思っていたが、それは叶わぬこととなった。
あのコックさん達はご無事だろうか。

S35　佐々木拓子（盛の連絡拠点：盛宿）

南フランス　アヴィニョンからのメッセージ

河口純子

海外にいる私たち日本人にも何かできないかと思い、アヴィニヨン近郊にいる日本人、フランス人有志が集まり、アヴィニヨン市庁舎で義援金活動を行いました。そこからアヴィニヨン郊外に住む日本人の輪が広がり、アヴィニヨン日本人会を再び更新し現在日仏交流を続けています。遠く離れた国からの小さな輪が被災された方達に届き、これからの希望、勇気に繋がってくれる様にと願っています。

Keiko　Van Rij

今年の 3 月 11 日を目前にあれから既に一年が経とうとしています。時の経つのは早いですね。そんな中、既に復興が始まっている所も見受けますが一人一人の生活が以前同様に取り戻せたと言うにはほど遠い物が現状と察しています。被災地の皆様と一緒に復興への思いを共有したく、私達の星のかけら程の思いを皆様に届けれたらと常に思い続けています。

小さな親切、ささやかな思いやり、僅かな励まし、ちょっと頑張って、本の少しの喜びを分かち合う、そして仲間と互いに和を保ち、互いに敬い、信じ合い、時には冷静に語らう、いつも笑顔を忘れず未来に向　かって大きな幸せを感じるその日が来るまで（夢と希望）を持ち続ける事を願います。
私達を初め世界の人々がいつも応援している事を忘れないで下さいね。
復興可能を祈っています。

サントクチュール村から始まったメッセージ支援が、
大船渡とマルセイユの心を繋ぐ
（写真）わたなべまさき・在仏アーティスト

<大船渡市書初め展覧会、メッセージプロジェクト>が行われる

・主催　メッセージプロジェクト実行委員会

・共催　ジャパンエクスポ　マルセイユ、大船渡市盛小学校 S35 同窓会、

・期間　2012 年 3 月 3 日から 3 月 4 日　　マルセイユ市ボレリー公園

前を向いて進もうとしている子どもたちの決意を広く世界にアピールし、お互いの交流から明日への夢と希望を届けたいと企画されました。
3 月 11 日にはアヴィニヨン市庁舎で開催されます。

プロヴァンスの春便り

青山あゆみ

うちの庭のアマンディエと働き者のマドモワゼルのツーショット。
蜂はフランス語で女性名詞なのでうちでは「お嬢さん」と呼んでいます。お嬢さん達は冬の始めに 20ℓのはちみつを宿主にプレゼントしてくれました。今まで味わったことがないすばらしい風味の蜂蜜です。
次は庭でとれたトリュフとじいさんトリュフ犬のひなたぼっこシーン。トリュフは小さく見えますが結構大きいです。これを生卵といっしょに 2 日くらい密閉容器の中にいれておき、その後トリュフの匂いがうつった卵でオムレツを作ります。じいさんは直射日光に弱いので日本の 100 円ショップで買った野良仕事用の帽子がお気に入り。まだまだ若いもんには負けられないということで 80 を越えた今でも、地中から発するトリュフの匂いをかぎわけてご主人にお知らせします。

～あゆみさんは被災地へミルクを送りたいとの願いから S35 と繋がり、現在フランスと日本の支援のかけ橋役、壁新聞プロジェクトの指南役として各方面に奔走している。浅草生まれの江戸っ子。在仏 13 年。～

海　鎮魂と新生の詩　　金子静江：詩人

1927 年 3 月山形市生まれ。「生活綴り方運動」の村山俊太郎の薫育を受ける。演劇を志し上京、新演劇研究所で学ぶ。親子音楽の会、日本童謡協会で“歌うための詩”を書く。
三木露風賞ノミネート賞。上野東照宮に「原爆の火を永久に灯す運動」の創作詩全国一位入賞。創作オペラ台本、合唱曲などCDに収録作品多数。 現在、日光市在住。

海　鎮魂と新生の詩

金子　静江

なにものとも知れない
巨大な力に突き動かされて
わたしはあの日　陸地に駆けあがった
逃げまどうひとびとを飲みこみ
家を崩し　樹木をなぎ倒し
大きな漁船を軽々と運び
陸地深く　進んで行った
すべてを打ち壊し　攫いつくしたのだ

そこに　どんな人間の歴史があり
ひとびとの暮しがあったのかを知っている
男たちは　海の幸を求めて船をこぎ出し
わたしはいつもふところをひらき
すべて受け入れ見守ってきた
女たちは　子どもを産み　育て
日々のいとなみを守り
それぞれの思い出を　大切に抱いて
生きているのを　見てきたのだ

わたしは　やさしく渚に打ちよせ
夜の大気の底に眠る人に　うたいかけた
波にたわむれ　あそぶ子供たちに
永遠の鼓動をつたえてきた
遠い遠い昔から
かわらぬ風景の中で――。

わたしを呼び返す
大きな力にさからうすべもなく
すべてを抱いたまま　沖に戻ってきたのだ

わたしの有るべきところに。
地球と宇宙のおきての
命ずるままに――。

人間たちは　わたしに問いかける
海よ
暮しの糧をいつも
豊かにもたらしてくれた
海よ
あのやさしさは
いつわりの仮面なのか
あの黒潮のうねりは
つかのまの幻影だったのか

残酷な映像の中に
ひとびとは立ちつくす
声をからすまで　叫ぶ
わたしの子供を返して！
許してくれ

満月の光りが
波がしらにきらめくとき
渚に立つあなたに
ここに抱いているひとの
声をとどけよう

力の限り　生きぬいてくれ
故郷に　また灯りがともったら
海にねむるわたしたちを
みんなの心に呼びもどしてほしいと
この声は　うたっている

その日まで
わたしは魂の揺りかごとなり
海原のふところ深く抱きかかえよう
朝焼けの空に
あたらしい太陽が昇るとき
見てほしい　わたしの
新生への祈りが燃えているのを――。

二〇　一二年二月　　立春の日